

AJCC研究会報告

私の珍品カメラ Part II

会員番号0022 高島 鎮雄

今回はある絵本の話から始めさせていた
だ。その絵本はドイツのトーベン・クールマン
作、金原瑞人訳の「アームストロング宙(そ
ら)飛ぶネズミの大冒険」という。1969年の
ニール・アームストロングより14年も前の1955
年に、一匹の子ネズミが自らロケットを作って
月面着陸を成し遂げたというお話である。
ニール・アームストロングがアポロ11号の着陸
船から月面に降り立った時、彼が見つけたの
は有翼のネズミを描いた小さな旗であったと
いう、大人のための物語だ。

実は数ヶ月前この絵本が朝日新聞に紹介
され、親指の爪ほどの小さな写真が掲載され
た。それは地球に戻ったネズミのアームスト
ロングを大勢のネズミが出迎えているシー
ンで、そこに報道を象徴するアイコンとして1台
のライカⅡFが子ネズミたちに対して原寸大
で描かれているのだ(なぜⅡFなのかはわか
らないが、もしかしたらクールマンがⅡFを
もっているのかもしれない)。しかし何か変だ
ぞ? そこで眼鏡を外して超弩近眼で見ると、
なんと左右が裏焼きになっているのだ。日本
語版出版元のブロンズ新社に問い合わせた
ところ、原本もそうなっているという。「フィ
クションであることをそれとなく示すための、彼
一流のユーモアではないだろうか」というのが
出版元の見解である。

なんで私がこの裏焼きのライカにそんなに
拘るかといえば、実は私が最近レフトハン
ダー用のライカⅠAを入手したからである。あ
れは確か、我々のカメラ趣味の大先輩の故
北野邦雄さんの戦前の著書で読んだのだと
思うのだが、「ライカとコンタックスには図面を
裏焼きにして作られた左利き用がある」とい
うのだ。これはたぶん世界中のサウスポウの夢
を代弁したもので、実際には左利き用のライ
カもコンタックスも存在しない。(北野さんの著
書は持っているはずで、家中探しているのだ
が、現時点では見つからない。よって北
野さんの著書というくだりは? マーク付きにさ
せていただく)。

ところがだ。実はコンタックスにはないが、
ライカには左利き用があるのだ!

もちろんライカ自身が作ったものではなく、
後に外部で作られたものであるが。私が最近
入手したものは、旧ソ連邦、モスクワの偽ライ



「アームストロング」、トーベン・クールマン著、
金原瑞人訳、ブロンズ新社刊。
ニール・アームストロングより14年も前の1955
年に、小ネズミのアームストロングが月面着陸
を果たしたという楽しい絵本。



これがモスクワのフェイク・ライカ工房製とされ
るフェトⅠ「レフトハンデッド・スペシャル」。左右
はほぼ完全に逆になっており、レンズのヘリコ
イドもフィルム/シャッターの巻き上げも逆回転
である。

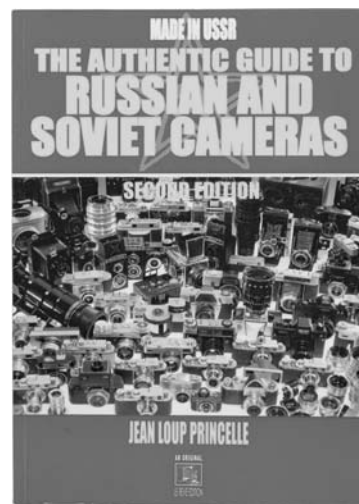
カ工房で作られたらしいⅠA型のレフトハン
ダー用である。

前号で山前さんが触れておられたフランス
のカメラ研究家で、多くの著作を持つジャン・
ルー・プランセルさんの著書「MADE IN
USSR, THE AUTHENTIC GUIDE TO
RUSSIAN AND SOVIET CAMERAS」にも出
ている。プランセルさんはこのカメラを「フェ
イク・ライカ」の項に含めながら、「フェイク・ラ
イカ」の概念を高尚化するもの」と評している。

正直に言って、このカメラがいつ、どこで、
誰によって作られたかはまったくわからない。
しかしフェトをもとにお土産用に作られた偽ラ



月から帰還したアームストロングを多くのネズ
ミが出迎えるシーン。報道を象徴するために描
かれたライカⅡFらしきカメラが、実はサウス
ポ一用なのである。比較のために手前におい
たのは私のズマリットつきⅡF。



ジャン・ルー・プランセル編著の「メイド・イン・
USSR,ロシアとソヴィエトのカメラの真正ガイド」
(第2版、英語版)。

イカと一線を画すものであることは間違い無
い。なぜなら単なるお化粧直しではできず、
多くのパーツが裏焼きしたブループリントをも
とに新製されており、かなり高度な技術が投
入されているからである。例えばレンズは向
かって時計回りに回すと繰り出されるが、と
いうことはヘリコイドが標準とは逆に切られて
いるということになる。これは単なる外見の偽物
作りにはできないことである。シャッターの軸
配置も走行方向も逆だから、巻き上げは左巻

FED I "LEFT HANDED SPECIAL"

The inverted Leica has been the dream of every left-hander in the world. What Leitz never constructed has been done by a talented Moscow counterfeiter. All the "guts" of the camera are mirror images of the original, even the screw threads of the focusing helicoid. It's an incredible piece of work and one which really ennobles the notion of the "fake" Leica. Because the camera works, naturally!! All we can say is Bravo!! Variant: black lacquer model. Once again, Bravo!

GIANT DISPLAY WINDOW LEICA REPLICAS

Several "replicas" of gigantic display Leica's have shown up on the market. Superbly done, they find room quite comfortably in display cabinets in the salons of well-heeled amateur collectors.



Document M.P. Mladek

ブランセルの著書の101ページ、フェイク・ライカの項にフェト I "レフトハンデッド・スペシャル"として紹介されているカメラ。これはゴールド仕上げだ。



きで、シャッターダイヤルもフィルムカウンターも逆に目盛られている。レンズが向かって左にオフセットしていることと、ホッケースティックと呼ばれるインフィニティーロックが逆で右にあることが外観上大きく目立つ点がある。シャッターダイヤルの台はライカのそのものを前後逆に用いているが、巻き戻しノブは低く太い I A 用ではなく、スタンダード以降の細く中央にビスの入ったものになっている。

どこまでがフェトで、どこからがライカなのかよくわからない。ライツ・エルマーと刻まれたレンズも、どうやらエルマー・コピーのインダスタール-10のようである。総じて本当に左利きの人のために作られたものであるか否かは疑わしい。というのもフィルムチェンバーの入り口が狭すぎて、普通のパトローネもライカのマガジンも入らないからである。機能はちゃんとしているのに、これでは試写することができない。もしどうしても試写をするならコンレットか一時期あったアグファの細いパトローネを使うしかない。しかしこのカメラ、そこまでして試写をする気になれないのも事実である。私は「裏焼きライカを作った挑戦する心に打たれる」のであって、逆ネジのヘリコイドを回せることで充分満足しているのである。

ティカル・ビューファインダーを備えた35mmカメラである。第二次世界大戦中英国では陸軍省が偵察用に民間からライカのボディを大量に買い上げ、民間には交換レンズが残ってしまった。戦後それらの交換レンズを生かすべく案出されたのがペリフレックスだとされている。しかし肝心のペリスコープでは望遠レンズで被写体を捉えるのが難しいし、交換レンズ用のファインダーもない。そこでモデルチェンジした3型以降用として作られたのがこの望遠レンズセットであろう。

私のセットは“ゴールドスター”を入手したら付属品として付いてきた。一口に言えば標準レンズを外したところに分厚いアダプターをねじ込み、それに専用レンズをねじこむというもの。このアダプターが上に伸びて、そこに望遠レンズ用のオプティカル・ビューファインダーが付いている。このファインダーには240mmと400mmの2種のブライトフレームならぬブラックフレームが入っているが、私のセットには240mm、F4.5のテレ・ルマックス(Lumaxの発音はラマックスだろうか?)だけが付いてきた。ファインダーには240mmと400mmのpara

通常のライカ I A(下)とレフトハンデッド・スペシャル。スクリュー・ライカはレンズ位置が1:0.76(56.7%:43.3%)で左にオフセットしているが、レフトハンデッドでは逆転しており、当然ながらボディは完全に新製されたものである。私のレフトハンデッドでは巻き戻しノブが II / I C の細いものになっている。

ラックス補正マークが入っていて、少々煩雑ではある。

ボディにアダプターとレンズを取り付けたところは、ご覧の通り大袈裟で仰々しい。アダプターはアルミニウムのブロックから削り出されたもので、仕上げは精緻だがエッジが立ちすぎて少々手に痛い。重さもかなりのものだ。いかにもあと知恵のアクセサリーで、しかもライカのそれのような洗練されたものではない。こんなに苦勞するのならボディを一眼レフにしてしまえばいいのに、と思わず考えてしまうが、まあ他に例を見ないものなので珍品としてご紹介した。

次にお目にかきたいのは英国、コーフィールド社のペリフレックス用望遠レンズセットである。ペリフレックスはご承知のとおりライカ・スクリュー・マウント・レンズが使えるように潜望鏡(ペリスコープ)式ピント検出装置とオプ

望遠レンズのセット
ファインダーが固定された
アダプターとレンズ



コーフィールド・ゴールドスターにルマックス240mm、F4.5望遠レンズを装着したところ。上部に240mmと400mm兼用のビューファインダーが作り付けになっている。この状態でペリスコープによるピント合わせができる(ただしピントグラスが小さいので、被写体を捉えるのが難しい)。

ボディにまずアダプターを締め付け、それにレンズをねじ込む。



写真(左) 珍しいフリードリッヒ・デッケルの試作シャッター、“S~COMPUR~S”。いわばリムセット・コンパーの prototypes。メインスプリングは旧コンパーと同じ位置にある。リムによる速度選択は量産型とは逆だ。写真(中央)S~COMPUR~Sの最大の狙いはリムセットにある。カムには1速ごとにリフトを変えるための小ネジがついている。写真(右)リムを外したところ。怖いのでまだこれ以上は分解していない。



ダイヤルセット(旧コンパー)

リムセット(新コンパー)

リムセット・コンパーのリムを外したところ

最後までカメラではなく、シャッターである。日本のカメラのインターネット・オークションを見ていると、時としてとんでもないものが出品されて驚かされる。このシャッターもその一例である。ドイツ、ミュンヘンのフリードリッヒ・デッケル社の“S~COMPUR~S”と言い、一見したところリムセットの新コンパーのようでもあるが、おでこにはダイヤルセットの旧コンパーのような出っ張りがある。いったいこれはなんだ？ 私はとっさに、また直感的に、これは「新旧コンパーの間に位置する prototypes ではないか」と思ったが、現物入手してみると、まさにそのとおりであった。

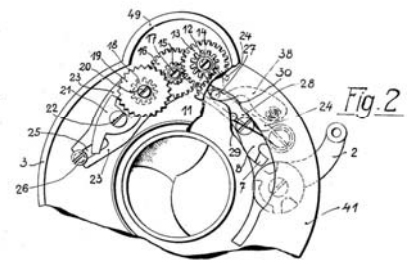
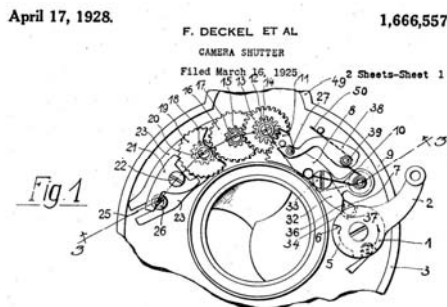
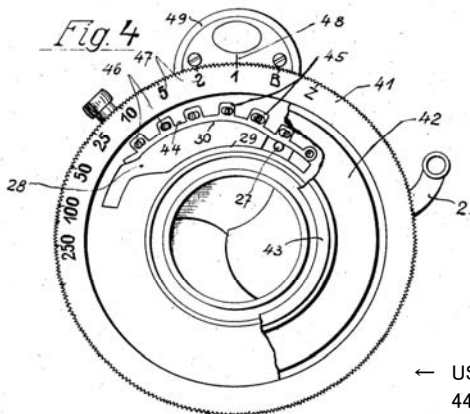
幸いD. R. P.(ドイツ帝国特許)のナンバーが打刻されているので、特許に強い林田さんをお願いして当時の独、米の特許公報を入手していただいた。ありがとうございました。D. R. P. 405,660そのものの図面が(感謝)。

それによるとリムの円周上に刻まれたカムでガバナーのついたギアトレンの角度を変え、ガバナーの作動時間(すなわちシャッターの空いている時間)を調節する方式で、明らかにリムセット・コンパーとして結実する方式の萌芽と言えるものである。ダイヤルセットのようなおでこの出っ張りは、高速側にした時にギアトレンの尻尾がシャッターの外周の外へ出てしまうので、急遽つけられたカバーであった。

シャッターの2時方向にはチャージレバーがあり、リリーズレバーは7時半方向にある。作動秒時はZ(タイム)、B、1、2、5、10、25、50、100、250で、刻み方は生産型リムセット・コンパーとは逆に向かって右から左になっている。面白いことに、最初期のリムセット・コンパーではリムにラーメン井状の模様がつけられているが、それはすでに本機にも見られ

る。機構的に面白いのは、リムの内周に刻まれたカムの近くに、秒時ごとにごく小さいビスがついていて、それを回すことによりカムのプロファイルを変え、開いている時間を調節できるようにしていることだ。しかしそれはあまりにも微細なので、量産型ではヤスリで削ったり、近くを鑿で打って伸ばしたりして調節しているのはご承知の通りだ。

この prototypes をさらに発展させ、ガバナーの輪列を動かさずに作動時間を調節するようにしたのがリムセット・コンパーである。それにしても1924年4月9日に特許が成立したこのシャッターの prototypes が、どこをどう通ってきたかはしらないが93年後に私の手に届いたのは一つの奇跡のように思える。だからこれも珍品だ！



↑ 米国特許のFIG.1 及び 2。ガバナーの使い方は旧コンパーに近いが、ギアトレンを移動させるのでギアの一部がフレームの外へ飛び出す。
← USP(米国特許)1,666,557のFIG.4。27がガバナー調節用のピン、44がリム41に付いたカムで、45、46の小ネジでカムのリフトを調整できる。